

学校教育目標



須和田が丘

夢 に向かっていく生徒
命 を大切に作る生徒
絆 を互いに深め合う生徒

令和4年度
学校だより No. 24
令和4年10月4日

市川市立第二中学校
校長 石田 清彦

ホームページ <http://www.dai2-tyu.ichikawa-school.ed.jp/>

単元テストについて 3

定期テストの廃止及び単元テストの導入について、学校の考えを記載させていただきます。なお、「学校だより No.9・10」と重複するところもありますが、ご了承ください。

これからの時代は「予測困難な時代」と言われ、社会全体が答えのない問いに立ち向かっていかなくはなりません。そのような中で、学習指導要領が改訂され、これからの教育の方向性が示されました。

その中で「学力」については、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等を育むとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かし多様な人々との協働を促す教育の充実に努めることが重要であるとされました。特に主体的に学習に取り組む態度を養う「学びに向かう力」は、「知識及び技能の習得」「思考力、判断力、表現力等の育成」を、どのように働かせるかを決定付ける重要な要素であると言っています。

また「学習評価」については、「生徒にどういった力が身に付いたか」という学習成果を的確に捉え、教師が指導の改善を図ること、そして、生徒自身が自らの学習を振り返って次の学習に向かうことができるようにすることが重要であると言っています。実際の評価に当たっては、いわゆる評価のための評価に終わることなく、教師が生徒のよい点や進歩の状況などを積極的に評価し、生徒が自分自身の目標や課題をもって学習を進めていけるようにすることが大切であるとしています。

このため、実際の評価においては、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら評価の場面や方法を工夫し、学習の過程の適切な場面で評価を行う必要があるとし、その際には、学習の成果だけでなく、主体的に課題解決に向かっていく過程も重視することが大切であり、特に、他者との比較ではなく、生徒がどれだけ成長したかという視点を大切にすることが重要であると言っています。

また、令和3年度の中教審答申「令和の日本型学校教育の構築を目指して」では、生徒が自己調整しながら学習を進めていくことができるように指導することの重要性も指摘しています。

二中が始めた「定期テストの廃止と単元テストの導入」は、こういった方向性を具体化するための取組です。

しかし実際に実施してみると、学校評価の自由記述や生徒の意見のように、ご不安やご心配に思うことが出ています。そこでそういったことについて、学校の考え方を説明させていただきます。

先ず、「定期テスト前は、勉強に集中できた」という声がありました。たしかに定期テスト前は部活動の停止期間があり、集中して勉強をしていたと思います。しかし、定期テストは出題範囲が広いというに、昨年度の期末テストは8教科ありました。例えば1週間、毎日帰宅後に4時間勉強した場合には、1教科の勉強時間は、単純に8教科で割ると正味3.5時間となり、決して多いとは言えません。また、短い期間に広い範囲の勉強をした場合は、「理解」という深型学習よりも「暗記」という浅型学習になる傾向があると言われてしています。

「暗記」という浅型学習で定期試験を乗り切ったとしても、試験が終わると、せっかく覚えた知識をきれいさっぱり忘れてしまうことはよく見られることです。エビングハウスの忘却曲線によれば、人の脳は1度勉強したことを1時間後には56%忘れ、1日後には74%、さらに1週間後には77%、1カ月後には79%を忘れるとされています。もちろんこれには個人差がありますが、概ねこのように、時間が経つほど記憶は減っていくのです。

だからこそ、毎日の積み重ねができる学習姿勢を身に付け、記憶の定着を図るとともに、「理解」を深め、学力として定着させることが大切なのです。試験前だけ集中して勉強するより、日頃から少しずつ勉強することが、学力定着には必要であり、定着率向上のカギは、能動的な学習なのです。

「学校だより No.22」で掲載しました、生徒アンケートでは、78%の生徒が、「単元テストになって、定期テストの時よりも家庭学習の時間が増えた」と答えており、毎日の能動的な学習の面で、良い結果が表れていると考えています。

裏面に続きます

次に、モチベーションの話がありました。定期テストの方がモチベーションが高くなるということですが、「テスト」を学習の動機づけとした場合には、テストが終われば学習意欲は減退してしまいます。それは、テストはあくまでも外的な動機付けに他ならないからです。テストが終わると、ついを抜いてしまい、勉強時間が少なくなるケースは多くみられます。しかし、学習への関心を高め、内的な動機付けによって勉強することも難しいことです。

そうであれば、同じ外的な動機付けであって、テストの回数を頻繁に重ねる単元テストの方が、学習意欲を維持し、学習習慣が身に着くのではないかと思われれます。

また、毎週のテストにより、生徒一人一人の日々の努力の過程も評価であることができるようになるのです。

次に、テストの範囲が広い方が高校受験には効果があるという意見がありました。確かに出題範囲が広い方が高校受験に向いているという面はあります。しかしそれは、定期テストのような範囲ではなく、学年をも超えた広い範囲でなくてはなりません。

このため今年度より実力テストの回数を昨年度より増やし、3年生は6, 9, 10, 11, 12月の5回、2年生は9, 12, 3月の3回、1年生は9, 3月の2回実施することとしました。

定期テストや単元テストは、学校で学習した内容について、範囲を決めて学力が定着しているかどうかを測るものですが、実力テストは出題範囲が決められてなく、学年を超えた広い範囲で、その時点で自分の学力を測るものです。このため、実力テストは受験時のテストと同じような内容になり、高校入試における得点力を見通すことができます。

つまり、単元テストや定期テストでは測れない学力を、実力テストで補っているわけです。

次に、定期テスト廃止で負担が増えたという声がありました。一方生徒の意見の中には、定期テストの時の方が負担は大きかったという声もあります。しかし、学習を本分とする中学生にとって、「学習」は「負担」ととらえるべきものでしょうか。確かに、「翌日までに到底できないほどの課題を出す」などは「負担」と捉えられるかもしれません。

しかし単元テストは、能動的な学習を促し、日々の学習習慣を身に着け、学力向上を図るための取組です。毎日の学習が定着すれば、それは負担ではなくなります。定期テストの前だけ勉強を頑張っていて、その間何もしないのでは学力の定着は図られず、「定期テストだから勉強する」といった姿勢を変えなければならぬのです。

一方、単元テストは範囲が狭いために勉強がしやすく、今まで以上の高い点数が取りやすくなります。点数が高くなれば、達成感も得られやすくなり、自己肯定感が高まり、次の意欲へとつながることも期待できます。

次に成績の出し方が分からなくなったというご不安の声がありました。しかし、成績の出し方については、昨年度と変わっていません。

定期テストが単元テストになったということは、これまで複数の単元を一緒にして1枚のテストとしていたものを、単元ごとに整理し、実施を全教科一斉から、各教科それぞれに変えただけのことです。

成績は単元テストのほか、小テストやワークシート、授業中の学習や振り返りの状況などを含めて総合的に評価して評定を出しており、多面的に評価する考え方も変わっていません。また、テストの扱いにも変更はありません。

一方で、評価の信頼性は高まっていると考えています。例えば、100点を満点としたテストの場合、限りある問題数の中で、思考力を問う問題は6問しか出せなかったとします。二中は前後期制なので、定期テストの場合は前期に2回のテストがあり、合計12問の思考力を問う問題が出せます。しかし単元テストの場合は回数が増えますから、その分思考力を問う問題を多く出すことができるのです。前期に4回実施したとすれば24問です。つまり、より適切に生徒の思考力を評価することができようになるのです。

また、定期テストは範囲が広く、いくつかの単元がまとまって出題されるため、どの単元が分かっているのかが分かりにくい面があります。しかし、単元ごとに試験するようになれば、どこでつまづいているのかが把握しやすくなるのです。

学力の状況が把握できなくなったというご意見に対しては、通知表とは別に「学習の記録」を提示することとしました。「学習の記録」には、単元テストの点数のほか、通知表の基礎点となる評価が示されていますので、ご確認くださいませよう願いたします。

「学習の記録」によって、これからどこに力を入れて勉強をすればよいのかを、生徒一人一人が考える機会になればと考えています。

次号に続きます。